

最優秀賞

美しさを取り戻して

京都市立向島秀蓮小中学校 九年

村川 和

二〇二〇年、世界は新型コロナウイルスの流行により、それまで出来ていた当たり前のことが出来なくなりました。私たちは我慢が基本の生活に変えなければならなくなっていました。日常の外出や娯楽が制限され、街の店が閉まり、人々の姿が消えた。学校も臨時休校になり、毎日不安な日々を過ごすことになった。

そんな三月のある日、新聞でとても興味深い記事を見つけた。イタリアの世界遺産の街ヴェネツィアで、街中の運河の水が改善されたというものだ。水が透き通り、普段は濁っている水の中で泳ぐ小さな魚、ボートの行き来が途絶えた運河を楽しむ鵜、シラサギなどの鳥、クラゲの泳ぐ姿が見られたという。

ヴェネツィアはアドリア海のもつとも奥にありヴェネツィア湾のラグーナの上に来た、運河が縦横に走る水の都である。かつてはイタリア本島から離れた孤島であったが、リベルタ橋が開通し本土との自動車での往来が可能になった。しかしヴェネツィア島内での自動車での移動は規制され、路地や橋の通行はできない。そのため何世紀にもわたり、運河を進む舟が交通の主要手段として存在している。以前は、ゴンドラと呼ばれる手漕ぎ舟が物資を運んだり人々の移動にも使われていた。近年では、そのゴンドラが運河を巡る観光の目玉となり、また観光地へ向かう交通手段として存在しているようだ。他にも水上タクシー、水上バス、渡し船などが島民の生活を支えている。

このようにヴェネツィアは、長い歴史の中で水と共生した生活を送っている。しかし、運河の水質がコロナ禍で改善したということは、その前は悪い状態であったということだ。

改善された要因は何か。ヴェネツィアの運河の水は通常、底にたまった泥が観光や生活のためのモーターボートで巻き上げ

られたり、観光客の捨てたポリ袋やごみが浮かんでいたりと汚染された状態だった。しかし、コロナウイルスの流行により、人々の移動が制限され、観光客の姿もなく、水上交通量が減少した。そのため、皮肉にも水質が落ち着いたということだ。観光という人間の娯楽を始め、生活でも大切な水を汚してしまっていることに私は危機を感じる。

ヴェネツィアに限らず、人の暮らしの上で水は欠かせない。飲んだり料理に使ったり、お風呂やトイレ、洗濯など一日に一度も水にさわらない日はない。日常生活だけでなく、農業や工場、スーパリーなどでも大量に使う。それなのに、過去には自然に分解されない物質をそのまま排水したり、人間のエゴにより勝手なことを繰り返してきた。

私たちは今後、過去の過ちを反省するだけでなく、これ以上の悪化を防ぐためにも、人間の知識をもって取り組まなければならぬ。

私に今出来ることは何か。日々の生活の中で、油や自然分解されない成分の入った洗剤を使わないなどはすぐ出来る。調べていくうちに、使い捨てカイロを加工して水質を改善するという記事を見つけた。カイロに含まれる鉄と、ヘドロに含まれる硫化水素が結合し悪臭が減り、ヘドロそのものも分解され水質改善に繋がるとのことだった。使い捨てカイロを集めてその取り組み先に送ったりすることも出来るようだ。

ヴェネツィアに関して、また新しいニュースがあった。二〇二一年三月、運河の水位が五十センチほど干上がってしまった。通行に支障が出ているらしい。原因は高気圧で、雨量が少ないことだそう。このように人の暮らしは、様々なことに影響されるが、それを踏まえ、資源を大切に毎日丁寧に暮らしていきたい。

九州の佐賀県の小さな離島に曾祖父が住んでいる。今年で満九十七歳になる。毎年夏休みには必ずいとこたちと帰省していたが去年はコロナの影響で帰省できなかった。曾祖父は九州弁で話すので言葉は聞き取りにくいのが、僕がそばに行くといつも頭を撫でて「大きくなつた」と喜び、しばらくすると戦争の話が始めた。食べ物はもちろん、飲み水にも苦労していたと話した。僕たちが水道をひねり水を流しっぱなしで手を洗っている、曾祖父は決まって「もつたいたいから水を止めなさい」と言う。僕はときどき、この「もつたいたい」という言葉を思い出し、節水を心がけている。

日本に住んでいる僕たちのほとんどは、水道をひねれば当たり前にきれいな水が出てくる環境で生きている。その水はそのまま飲み水として使用することができるほどである。こんなにもきれいな水を使い、僕たちは掃除や洗濯をしている。果たしてこれは、世界中でも当たり前なことなのだろうか。

小学生の頃、僕と同じくらいの年齢の子どもたちが水を汲むために何キロも先にある川まで歩いてくるのをテレビで見た。その水は日本で暮らしている僕たちにとっては、「きれいな水」と言えるようなものではなかった。彼らは生きるためにその水を生活用水として使用していた。もちろん飲み水としてもだ。僕は何ともやるせない気持ちに包まれたことを今でも覚えている。

多くの発展途上国では浄水処理をしていない水を飲み水として使用し、年間で一五〇万人以上の子どもの命が失われているそうだ。生きるために飲んだ水で、命を落とす。こんな悲

惨な現状の中、僕たちにできることはあるのだろうか。今はまだわからないけれど、こんな事実があるということを決して忘れてはならないと思った。

近年、日本だけでなく世界中で想像を絶するような水の災害が起きている。水の星、地球。水の恵みによって育まれてきた生命が、今、水によって奪われている。環境破壊による地球温暖化も深刻化している。それらを食い止めるためには、限りある資源を大切にし、持続可能な社会を創っていくことが大切だ。

僕は曾祖父の住む九州の海が大好きだ。透き通っていて、小さな魚たちがたくさん泳いでいる。そんな九州の海も、海岸にどこからか漂流してきたペットボトルなどのゴミが大量に打ち上げられている。海洋汚染もまた、人間の生活が大きく影響している環境問題の一つだ。海の無い県を流れる小さな川でも、マイクロプラスチックが採取されたという。海洋汚染を防ぐためにも、僕たちの日常生活をもう一度見直すべきだ。

去年、僕の曾祖母が亡くなった。曾祖父と同じ九十六歳だった。曾祖父のようにおしゃべりではないが、いつも優しい笑顔で見守ってくれていた。葬儀の時、僕の間からは自然と涙があふれた。涙の塩分濃度は原始海洋の濃度と同じだそうだ。涙も海水もしよっぱい水であることに変わりはないが、涙のようにいつまでも美しい海であってほしい。

優秀賞

「水」を通して世界を見る

綾部市立上林中学校 一年

川北 歌那

「どんなに汚くても、この水を飲むしかない。」

日本ユニセフ協会のホームページにアクセスすると、バケツで茶色にごった水を飲む少年の写真と共に、胸を突かれるようなキャッチフレーズが私の目に飛びこんできました。

「やっとの思いで手に入れた水は、命と未来を奪う水。」

水は生命にとって欠かせないもので、命と未来へとつながっていくものだと思っていたので、この事実を理解するには、世界の「水」について調べないといけないと思いました。

小学校六年生の時、水道整備のため、家の水が使えない日がありました。そのとき、私は、「たった一日でしょ。」とあまり深く考えずにいました。ところが、いざ生活をしてみると、ふとしたときに「あ、今日は水が使えなかったんだ。」と我に返ることが何度もあったのです。トイレはもちろん、お茶を飲むにも、ご飯を作るにも、水がないと、不便で困ることにようやく気が付きました。私の生活そのものに「水」が関わっていることを体験して初めて理解しました。

父に、「歌那は水も飲めるし、温泉もあるし恵まれているね。」と、その時に言われたことが、今はよくわかります。

日本をふくむ世界の人口の半数以上が水道を使えるようになった現代。それでも、今なお六億六三〇〇万人の人々が安心して飲める水が、身近にはありません。日本は水道整備が行き届き、快適に生活している人がほとんどです。しかし、世界に目を向けると、安全に、自由に水が使えない人があふれていることを知りました。

また、私と同じ年代の少年少女が、朝早くに起き、危険な道のりを歩いて水汲みに行くため、学校に行くことも、遊ぶこと

もできない日々を送っていると知り、水を飲んだり、得られたりするのには、当たり前ではないことがわかりました。

私が暮らす地域には、上林川というふるさとの自まんの一つである美しい川が流れています。上林川は、水質がきれいなだけでなくオオサンショウウオ、アユをはじめ、色々な種類の生き物がすんでいるので大好きです。

美しい川は、人の手が加わらないと汚れていきます。地域の浄化設備が整っていないこともあり、生活用水、農業用水を川に流さざるをえない場合もあります。また、心ない人がゴミを捨てることもあります。上林川は、私たち地域住民や「上林川を美しくする会」という団体の方など、たくさんの方が関わり、川を「守ろう」「未来へ残そう」という思いをつないでいきます。

ユニセフが支援していることも同じだと考えます。安全な水を手に入れられない人々がいることを世界に向けて発信し、当たり前前に水を飲み、水を使っている国の人々に、自分にできることを考えてもらう。集まった募金で、手押しポンプを設置したり、汚染水を飲んで病気になった子どもの命を守る薬を支給したりして、支援していく。より多くの人が困っている人たちに関われるようにすることで救える命が増えるのだと思います。

今、関心が高まっているSDGsの目標に「だれもが安全な水とトイレを利用できるようにし、自分たちですべて管理し、支援しけるようにしよう」という水に関する項目があります。支援して終わりでではなく、地元の人たちが自分たちの「水」を自分たちで守っていくことも必要だということに気が付きました。それは、国がちがっても共通している点で、私がふるさとの川を大切にしていこうとしていることと同じなんだと思います。

時間がかかっても、「どんなに汚くても、この水を飲むしかない」選択肢ではなく、「安全できれいな水だから飲む」選択肢に変えたいです。

特別賞

きらわれ者のヒーロー

大山崎町立大山崎中学校 二年

前田 浩太郎

僕が住んでいる家には、百年以上前からある、深さ十五メートル程の井戸がある。僕たちの家族は、いつもその井戸水で洗たくなどをしている。つまり、僕たち家族にとってその井戸水は、とても大切なものだ。僕は、そんないつも使っている井戸水について興味をもったので今から書く文にしようと思った。これから、井戸と井戸水についてのことを書こうと思う。

井戸水は、基本的には、雨が降り、その雨水が井戸にたまつたものである。つまり、毎日洗たくをその井戸水で行い、毎日晴れの日が続くとすれば、井戸にたまっていた水がすべて無くなり、枯れてしまうという事だといえる。僕も、井戸水でくつを洗っていると、水が急に止まってしまう、井戸が枯れてしまったという経験がある。このことから、井戸水を使って洗たくなどをしていると、いつか井戸が枯れて、洗たくができなくなってしまうということだ。そうなってしまったら、次の策を考えなければならぬことになり、それは正直に言つてとても面倒なことだ。桃太郎に出てくるお婆あさんと同じことをしなければならぬ。もしくは、水道の蛇口からホースをつないで頑張つて井戸まで届かせてから、井戸に水を入れることしかできないのだ。このようなことから、井戸水がたまるために必要になる雨は、とても大切なものになつてくるということだ。だから僕は、雨の日に他の人たちは気分が下がるかもしれないが、逆にすごくラッキーだったり、ほっとする気持ちでいる。雨には感謝しなければならぬと思つている。なので僕は、たまつた井戸水を使つて何かをするときには、少しでもむだが生じないよう、自分なりに工夫し、努力していきたいと思つた。僕は、雨の重要さをみんなに知ってもらい、親しみをもつてもらえ

ばと思つている。雨が役に立っているところは井戸だけではなく。日常で毎日使つている水道水だつて、元をたどつていくと原点は雨水だ。雨水によって川や湖、海ができ、その水をきれいにして水道水となつていふのだ。このようなことから、雨水がふらなければ、日常生活にととても大きな支障が出るといふことだ。他にも雨水はたくさんさんの役割を果たしてくれているため、雨水は、地球のかくれたヒーローなのだ。つまり、僕が言いたいのは、ヒーローが参上しても、なぜ多くの人がきらうのか。ふつうの流れだと、ヒーローが参上すればみんなが喜ぶはずだろう。それは、多くの人たちが、蛇口から水が出たりすることが当たり前だと思つているからだろう。そのようなことから、僕は、ふだんから雨水に対して、しっかりと関心をもち、水が出ることを当たり前と思わず、感謝しながら水を大切に使いたいと思つた。

このように、水は、当たり前だと思つて使われているが、実際ではそうではない。雨水というきらわれ者のヒーローがいるからこそ、今の日常がある。だから、僕はいつか、きらわれ者のヒーローから、人気者のヒーローになつてほしいと思う。そのためには、たくさんの人たちが、ふだん使っている水について知ることが大切だと思う。今は、水道から水が出ていいかも知れないが、昔は水道などなく、井戸だけだった。そのことから、昔は人気者だった雨水が、今ではきらわれ者になつている。これは、雨水がかわいそうではないか。いつもヒーローとしてしっかりと責任を果たし、頑張つているのに、きらわれ者だとおかしいと思う。僕はそのように考へている。将来、水への関心をもつ人が増え、水道から水が出ることができれば、よりよい世界になると思う。世界中でそのような人がいれば、とてもよい社会になり、雨水も、ヒーローになれると思う。

佳作

琵琶湖の水と自分との関わり

京都先端科学大学附属中学校 一年

櫻井 詢也

僕は学校に水筒を持って行きます。そこには、お茶ではなくいつも水を入れていきます。理由は、水がおいしくて好きだからです。ご飯を食べる時、運動する時、お風呂に入った後にも飲みます。水は飲む時によって、味が違うように感じます。例えば、疲れた時に飲むと甘い味がするような気がします。いつもよりおいしく感じて、生き返ったような気持ちになります。

僕は、自分が普段飲んでいる水はどこから来ているのだろうと不思議に思っていました。小学四年生の時に社会科の授業で琵琶湖疏水について学び、京都市の上水は、琵琶湖から来ていることを知りました。僕が飲んでる水は、元々琵琶湖の水だったことを知り、とてもおどろきました。そんな遠い所から水を運んで来ているなんて思わなかったからです。

琵琶湖疏水は、滋賀県大津市観音寺から京都市伏見区堀詰町までの全長約二十キロメートルの第一疏水、その北側を地下トンネルで平行する全長約七・四キロメートルの第二疏水、京都市左京区蹴上から北白川まで全長約三・三キロメートルの疏水分線から構成されています。今も現役で京都に安全な水を届けられています。

琵琶湖疏水は元々、京都に飲料水を届ける目的で建設された訳ではありませんでした。一八六九年（明治二年）に都が京都から東京へ移り、京都の人口が減り、街はさびれてしまいました。当時の北垣国道知事が京都の街を再び発展させようとして、琵琶湖から水を引いて、水力発電をし、機械を動かして新しい産業を興すことを考えました。また、京都と大津と大阪間で舟運事業を盛んにしようと考えました。僕は水を引いて来るだけでこんなメリットが生まれることが分かってすごく興奮しまし

た。今まで水を引くというのは単に飲料水に使用することだけだと思っていたからです。だけど京都の街が発展することにつながっていたのです。

明治三十年代になると、第一疏水だけでは飲み水や電力が足りなくなってきたため、第二代京都市長の西郷菊次郎が第二疏水を造ることを決定しました。その工事は一九〇八年（明治四十一年）から始まり、一九二二年（明治四十五年）に完成しました。また、この完成と合わせて第二疏水から取水する蹴上浄水場が完成しました。これによって京都市の本格的な水道事業が始まりました。そして現在もこの浄水場で浄水された水が僕たちの家庭に届けられているのです。

僕は琵琶湖疏水を造った人に感謝したいです。その人達が努力したおかげで今は、こうしてきれいな水が僕たちの家庭に届けられ、豊かに暮らせるからです。また、この琵琶湖の水にも感謝したいです。これがあるおかげで僕たちは健康に生きていけるからです。今度、琵琶湖へ行く機会があったら、その時には「僕らの命の源なのだな」と思いたいです。

佳作

疏水の偉大さ

京都先端科学大学附属中学校 一年

古川 晏

私の家の近くに、高さ二メートル以上の石ひがあります。これは、この地域の多くの人々が農業用水として明治時代、疏水から京都の山科の農家のため水をひいて、生活が安定した記念に建てられたそうです。石ひには、農業で生活していた私の祖先様の名前も刻まれています。昔、山科の農家は、日でも水が不足することも、たびたびありました。滋賀県の琵琶湖からの疏水が、身近な私の住んでいる所まで、流れてきているということになります。私は、生活を守るための昔の人々の努力が、すごいことだと思いました。そんな疏水を知りたいと思いました。

第一疏水は、明治十八年から工事が始まり明治二十三年に完成しました。全長八・七キロメートルです。琵琶湖から山科を通っています。この水のおかげで、京都は水が豊富にあります。米や野菜がたくさん作れるようになったり、町を清潔に保つことができました。また、蹴上にあるインクラインは、琵琶湖と京都を結ぶ輸送ラインとして利用されました。現在も残っており行ってみると、大きな台車の上に船が置かれ、線路の斜面も急だ、と思えました。二台の台車を、水中かつ車で吊るし荷物の重量バランスを取り、線路上を動かすのは、すごく輸送が便利になるなと思いました。この時代には、暮らしを豊かに良くしよう、とする熱い願いをもった人々が多くいたんだなと思ひ、昔の人の知恵はすごいなと実感することができました。他にもまだまだ気づかない所で、疏水の水は、姿を変えて私たちの生活や暮らしを、便利にしてくれていると思います。

現在、「船の運河の復活」というように、琵琶湖疏水は昨年六月に、六十七年ぶりに復活をとげました。私は、この船に家族

で乗りました。船に乗る前は昔の人が琵琶湖から山科に、どのようにしてトンネルをほったのか気になり、船に乗ることも楽しみで、わくわくしていました。三十分間、船に乗りガイドさんもあり、説明してくれました。船に乗ると長いトンネルがいくつもあり、入ってみると天井がごつごつしていました。それを見ると、昔の人が手作業でほった「大変さ」が残っていました。また、この船がトンネルをぬけた時の景色がとても美しかったです。四季折々に色を変える草木や花に縁取られて空の色を映して流れる水面と、季節によって鮮やかに変わる自然の美は、人々を喜ばせることもできるのだな、と思いました。この船は、疏水建設の意義を後世に伝えるためと、沿線の地域復興に結びつける目的だということを知って、疏水には、これからも人々に多くの役目があることが分かりました。

疏水の水「京の水」は、今も同じように私たちを支え続けてくれています。また、人々の手によって作りあげていき、多くの困難をのりこえ都市の成長を見守ってきたものだと思います。疏水のめぐみは京都の町、全体を明るく照らしてくる、まさに京都の風土だ、と思えました。水が流れているおかげで、私のご先祖様も農作物を育てることができました。なので、疏水のありがたさに感謝し、疏水の大きさはまだ知らない人たちに伝えていくことが大切ではないか、と思えました。

昨年6月に、疏水が文化庁の「日本遺産」に認定されました。疏水には史せきや古い建造物がたくさんあります。これからも、遺産としての京都の町を守る琵琶湖疏水は、四季折々に美しい表情を見せながら、これからも変わることなく脈々と、流れるといいなと思います。

佳作

水と歩む

綾部市立上林中学校 一年

井上 和折

山に囲まれた田園風景が広がり、そのふもとを流れる水のきれいな上林川。その川のすぐそばで、ぼくは生まれ育ちました。自然豊かな環境が当たり前だったので、きれいな水が身近にあることは、ぼくにとつてごく普通のこととして過ごしてきました。

上林には、六月に「ほたるの夕べ」というイベントがあります。上林川の川辺に行くとおぼつぼつと黄色にも黄緑色にも見えるたくさんのホタルを見ることができません。上林のホタルは地元の人だけでなく、他府県の人にも有名で、毎年たくさんの方がホタルを目当てに上林を訪れます。上林川の周辺だけでなく奥上林という地域には、ヒメボタルが生息している場所もあります。地域の方が撮影された写真には、イルミネーションのように輝くホタルの様子がおさめられていて、感動したこともあります。撮影した方は、これまでに撮影したもので、一番心を動かされたのが上林のヒメボタルだと話しておられました。上林のホタルを見るたびに「なぜ上林にはホタルがたくさんすんでいるのだろう」と思っていたので、調べてみると、ホタルが生息できる場所の条件は三つありました。

一つは「川の水がきれいなこと」二つ目に「水流がおだやかなこと」三つ目は「川にホタルのえさとなるタニシやカワニナが生息していること」でした。上林川は、三つの条件を満たしているから、たくさんのホタルが見られるのです。これは、めったにないことではないでしょうか。だから、他府県からも上林に人が集まるのだとわかり、何だかうれしくなりました。

しかし、地域の方々は、年々、上林からホタルが少なくなっていると言われます。その原因は、ぼく達人間です。

川のごれる原因の七割が台所から出る油や微生物などの排出物です。よごれたものを直接川に流さないように、洗う前にはまず拭き取るなど、しっかり処理することで、原因の割合を大きく占めるこの問題は、解決に近づき、川の美しさを保つことにつながると思います。普段、何気なく生活している中で、ぼく達の自まんである上林川をよごしてしまっていたことに気付きました。

上林川のすごさを実感したのは、小学三年生のときです。ぼくが通っていた小学校では、毎年、小学三年生と中学一年生が地元の高校生といっしょに水生生物調査を行います。その調査で、なんとオオサンショウウオに出会うことができたのです。「準絶滅危惧種に指定されているオオサンショウウオが、ぼくのふるさとに本当にいるんだ。」と興奮したことを今でも覚えています。

また、調査で「上林川を美しくする会」の方々に出会い、会のみなさんの努力のおかげで、川が守られていることを知りました。地域の人たちと力を合わせて、上林川をもとの清流にもどそうと活動されています。

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する。」

この言葉は、地域に根付いていて、ぼくは聞くたびに、上林に住んでいるみんなが、上林川のことを大切に、ずっと残していけるようにしたいと願っているんだということを出します。毎月七日、家の軒先に鮮やかな水色の旗が出ているのを見ると、上林川を大事にしている人たちが大勢いることを思い出し、自分自身も「水」を大切にしようという気持ちになります。

ホタルのすみかでもある川を守るのは、ぼく達人間です。ちよつとした思いやりが、いろいろな生物や自然を守ることにつながります。水は、人が生きるための大事な源でもあります。普段の生活を見直して、きれいな水があることに感謝します。日本にあるすべての川が、何年後も何十年後も、ずっとずっときれいなままであってほしいです。

佳作

私の水への思い“いい思い悪い思い”

大山崎町立大山崎中学校 二年

中田 優美

私は陸上部に所属しています。走った後の休けいの五分間は、毎回感動的瞬間です。それまで頑張ってきた分、水休けいの時間が天国と感じます。まさに、陸上をしている私にとって水とは：命の水！なのです。

母にも水について聞いてみました。

母が水と聞いて思い出すのは、二〇一八年の大阪府北部地震の時の事だそうです。朝の八時頃に発生し、私はその頃小学五年生で、すでに登校して教室にいました。その時、大きなゆれにおそわれて机の下にもぐった事を、よく覚えています。

その時、母と弟は自宅にいたそうです。母に聞いたところ、家族にケガはなかったのですが、ガスは止まり、水についてはにごった水が出るようになったそうです。母は断水するかと思いい、お風呂場に水をためたそうですが、水はにごっていたのでお米をとぐことやお茶をわかす事など、料理をする事ができなくなつて、水がなくても食べられるものをスーパーに急いで買いに行つたそうです。でも、スーパーではすでにミネラルウォーターは売り切れで手に入らず、サンドイッチやおにぎりなどは少し購入できたとの事でした。

この地震の時に水は生活において必須なものだと身にしみたそうです。

この地震の経験をふまえ、災害時に備蓄が必要な水の量を調べてみました。

大人一人あたり一日三リットル、三日分九リットルが目安とされているとインターネットに書かれていました。この量は飲料用や食事用など、飲料水として必要となる量で、そのほか衛生・風呂用やトイレ用などの生活用水も必要になります。どの

用途の水にどれだけの量を備蓄しておけば良いか、水の作文を機会に調べてみました。

まずは飲料用、人間は体重の約六から八割が水分からできており、一日二から三リットルの水を排出しています。そのため毎日同じ量だけ摂取することが必要ということです。

食事用として必要になるのは、ご飯を炊いたり、汁物を作るときの材料としての水と、食品をゆでたりするときに使う調理の水です。これらの食事用の水は口の中に入るので、飲料水が必要になります。備蓄には飲料用＋食事用として一日三リットル三日分に加えて、加熱用使用する分も備蓄にプラスすると安心なようです。

後は衛生・風呂用、トイレ用の水も必要になります。母はこの事を考えて、断水に備えて地震の後、お風呂に水をためたそうです。

地震の時の水の思い出を母に聞き、水の備蓄に関して調べました。私の家は実はこの大阪府北部地震で屋根に大きな被害を受け、雨もりがおこり、寝室がびしょぬれになったのです。ベッドやチェストがぬれて、とても大変な目にありました。

そして現在は、その家を取り壊し、新しい家を建てて住んでいます。

地震は怖かったし、家は壊れ、二階からは水が入るようになります。水には散々な目にあわされました。でも、水は、生きるために大切なものだと、私は知っています。

しっかり備えて、生活していこうと思います。